

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19520703  
研究課題名（和文） 新疆モンゴル地域における自然認識の動態に関する文化人類学的研究  
研究課題名（英文） Anthropological Research on the Natural Knowledge of the Mongols in Xinjiang  
研究代表者  
シンジルト（SHINJILT）  
熊本大学・文学部・准教授  
研究者番号：00361858

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学 / 民俗学

キーワード：文化人類学、自然認識、環境政策、新疆モンゴル地域、民族自治権、民族集団間関係、世代、儀礼

#### 1. 研究計画の概要

本研究は、自然と社会をめぐる人文社会科学領域における先行研究を批判的に継承しつつ、文化人類学的なフィールドワークの方法を用いて、中国新疆ウイグル自治区のモンゴル族諸地域を事例に、(1) その地域間、住民の世代間にみられる自然認識の相違と国家による諸政策やイデオロギー教育との関係について考察すること、(2) そうした相違の存在にもかかわらず、住民たちと動植物との関係のあり方を律するような、社会全体に流通している共通観念やその意味を読みとくことで、社会文化的な側面から環境問題への理解を深化させるものである。

#### 2. 研究の進捗状況

初年度の目的は、自然認識をめぐる新疆モンゴル族地域の特徴を巨視的に把握することにあった。(1) 文献研究で、中国西部を含む内陸アジア全域における近代開発のありようを民族誌的に検討した。(2) 現地調査では、3つのモンゴル族自治地域（バヤンゴール、ボルタラー、ホボクサイル）と、2つの民族自治権を持たないモンゴル地域（イリ、アルタイ）を調査し、基礎データを構築した。

2008年度では、地域間の自然認識の特徴を微視的に考察することに焦点を絞った。調査はホボクサイル＝モンゴル族自治県とイリ＝カザフ自治州の昭蘇県で実施した。調査で(1) 両地域で共通に、セテル〔何らかの理由で、特定の家畜や植物の魂や命を自由にするあるいは解放すること、人間が対象への

所有を自ら放棄する〕という慣習や慣習に違反した際受ける「処罰」のあり様を観察した。(2) セテルなどの慣習は自治県では、屢「モンゴル文化」の核心として、地方行政から保護支持を受けているのに対して、昭蘇県では必ずしもそうではないことが確認できた。(3) 自治権はないものの、交通の便が悪いが故に、古き良き慣習が残されている昭蘇県にこそモンゴル文化の真正性があると、自治県の人々は認識していることを把握した。

新疆における政治情勢の悪化や自然災害のため、2009年度では、新疆モンゴル地域のセテル慣習をめぐる比較研究を行なった。(1) 関西大学主催の国際学術フォーラム『文化交渉による変容の諸相』に出席、コメントを行ない、アジア農耕社会の自然認識に関する知見を広げた。(2) 熊本大学でシンポジウム『自然と社会のインタフェース』を組織すると同時に研究発表を行ない、人類学における自然と社会の関係をめぐる最新の理論動向を掌握した。(3) 中国本土最大のチベット仏教寺院、雍和宮で調査を行ない、次の3点が把握できた。新疆モンゴル懐柔のため18世紀建立された同寺院の僧侶の殆どはモンゴル族であるのに対して、参拝者の殆どが漢族である点、漢式に比べてチベット式の同寺院は参拝者にとって、より「本物」の寺院と理解されている点、境内で蛇や鳩などの放生（セテル）を行なう参拝者が増え、それに戸惑う僧侶が多い点。こうしたデータは、新疆のセテル慣習の意味をより立体的に考察するための最適な比較素材になった。

### 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

新疆モンゴル地域の自然認識の動態をめぐる3年間の調査研究において私はとりわけ、牧畜民(人間)と動植物(自然)との関係をより明確に表すセテルという慣習のあり方に着目してきた。まず、セテルをめぐる地域的(空間)な特徴、セテルに対する世代間(時間)の態度の相違を理解した。そして、時空間における人間と動植物の関係の特徴は、地域内部の文脈のみならず、外部諸力との関りのなかで生成・変容してきたことを認識した。さらに、変容するにもかかわらず、牧畜民の日常生活全般において重要な意味をもつセテルそれ自体が、他のイデオロギーに代替されることはない、という考察に至っている。

### 4. 今後の研究の推進方策

(1)自然と社会の関係をめぐる文献研究を行ない、二元論に傾斜してきた人類学的なアプローチを批判的に検討し、新疆モンゴル社会にみられる人間と家畜の関係の特徴、とりわけ特定に家畜個体に対して行なうセテル儀礼にみられる個体性という特徴を十全に説明できる理論的な枠組みを構築していく。

(2)セテル儀礼とシャーマニズムやチベット仏教との関係をより丁寧に吟味するため、新疆モンゴル社会のなかでも、シャーマニズムの影響が強いとされるイリ=モンゴル地域における現地調査を、一層強化していく。

(3)意欲的に成果を発表していく。研究成果の一部として、6月日本文化人類学会研究大会で「聖なる動物が解き明かす自然と人間の関係: 個体性、日常性、持続性」との題で研究発表を行なう。12月末まで『アジアの人類学』第3章「アジアの牧畜」(春風社)を脱稿する。本年度内、研究全体の成果を総括し『中国21』において公表する。

### 5. 代表的な研究成果

[雑誌論文](計3件)

シンジルト 2008 「王柯著『20世紀中国の国家建設と「民族」』(書評)『中国研究月報』3月号、62(3): 43-48

シンジルト 2007 「イリ地域調査報告」『オアシス地域研究会報』4(1): 73-80(査読無)総合地球環境学研究所・オアシスプロジェクト研究会

シンジルト 2010 「セテルにみる新疆モンゴルの自然認識の動態」『中国21』第34号(査読あり。年度内出版予定)

[学会発表](計6件)

シンジルト 2010 「聖なる動物が解き明かす自然と人間の関係: 個体性、日常性、持続性」日本文化人類学会 第44回研究大会(6月12日、新座: 立教大学)

シンジルト 2009a 「『聖なる水・こころの水 - 自然と人との相互作用(4名の発表)』に対するコメント」関西大学・ICIS 第2回次世代国際学術フォーラム(12日~13日、大阪: 関西大学)

シンジルト 2009b 「聖なる動物の扱い方: チベット仏教社会における自然認識の動態」熊本大学大学院社会文化科学研究科・F\_Rセミナー『自然と文化のインタフェース』(12月19日~20日、熊本: 熊本大学)

シンジルト 2008a 「セテルをめぐる語り: 新疆モンゴル社会の事例」九州人類学研究会、九州・沖縄地区研究懇談会(7月12日、福岡: 九州大学)

シンジルト 2008b 「聖なる動物の生まれ方: 新疆モンゴル地域における自然認識の一断面」桜美林大学、人間と動物をめぐる比較民族誌研究第1回研究会(12月7日、東京: 桜美林大学)

シンジルト 2007 「シルクロードにおけるモンゴル諸族の社会实践」(依頼講演)九州シルクロード協会交流会(4月21日、福岡: 博多リバレインオフィ)

[図書](計6件)

シンジルト 2010a 「オランムチル現象にみる内モンゴル・インパクト」『現代中国の民族誌 社会主義的近代化の諸相』川口幸大・長沼さやか編、明石書店(年内出版予定)

シンジルト 2010b 「第3章 アジアの牧畜」『アジアの人類学』片岡樹・シンジルト・山田仁史編、春風社(年度内出版予定)

SHINJILT 2010c 'Introduction Remote regions of western China and "ecological migration"', in *Ecological Migration: An Environmental Policy in China*, NAKAWO Nasayoshi, KONAGAYA Yuki, SHINJILT (eds.) PeterLang (in press)

SHINJILT 2010d 'Chapter10 Villagers' perception of nature in relation to "ecological migration"', in *Ecological Migration: An Environmental Policy in China*, NAKAWO Nasayoshi, KONAGAYA Yuki, SHINJILT (eds.) PeterLang (in press)

シンジルト 2007a 「黒河中流域住民の自然認識の動態」『中国辺境地域の50年: 黒河流域の人びとから見た現代史』中尾正義、フフバートル、小長谷有紀編、東方書店: 105-126

SHINJILT 2007b 'Pasture fights, mediation and ethnic narrations: aspects of the ethnic relationship between the Mongols and Tibetans in Qinghai and Gansu' in *The Mongolia-Tibet Interface: Opening New Research Terrains in Inner Asia*. Hildegard Diemberger and Uradyn E. Bulag (eds.) Leiden: Brill. pp.337-361